

トキワ荘の時代

——「漫画」から「マンガ」へ——

丸山 昭

一九五〇年代、池袋に程近い椎名町（現南長崎）に、若きマンガ家たちが住むアパートがあった。手塚治虫、藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、水野英子……。この「トキワ荘」に集まったキラ星のごとき才能たちが「他愛のない子供の娯楽」だった「漫画」を（文化）とまで評価される世界の「マンガ」へと育て上げた。編集者として彼らの創造の現場に立ち会い、『トキワ荘実録』手塚治虫と漫画家たちの青春』（小学館文庫）を著した丸山昭氏が、生きたマンガ史を語る。

■講談社入社と少女雑誌の担当に

私は昭和二十八年（一九五三）に講談社に入社しまして、翌年から児童雑誌に配属されました。講談社には『少年クラブ』や『少女クラブ』など、子どものための雑誌があり、いくつかの編集部で働きましたが、中でもいちばん長かったのは『少女クラブ』で

す。この顔でよく少女雑誌をやっていたと思われるかもしれませんが、私自身、最初に辞令をもらった時には「一体、おれに何をさせようというのか」と、寝ている間に性転換手術を受けたような（笑）、おかしい気持ちでした。

当時『少女クラブ』には、手塚治虫、うしおそうじという大難物の作家がいて、担当していた先輩編集者がへばっちゃったんです。代わりをどうするかという時に、隣の『少年クラブ』に大学を出たばかりの若いのがいた。つまり、私です（笑）。編集という仕事は頭脳労働だとばかり思っていたのですが、とんでもない肉体労働で、幾晩徹夜ができるかが勝負ですから、体力がなければ務まらない。それから家に何日も帰れない場合が多いので、結婚してはまずい。私が『少女クラブ』に連れて行かれたのは、それだけの理由に過ぎなかったと知るのはいづいぶん後のことです。

その頃の少女雑誌は、松島トモ子、小嶋くるみといった少女歌

手が売り物の時代。私は彼女たちを「トモ子ちゃん」とか「くるみちゃん」と呼べなくて、「松島さん」なんて言って笑われましたね。とにかく、少女時代を過ごした経験がないものですから（笑）、どんなことをやればいいのか、全くわからない。勉強しなくてはならないので、池袋の西武へ行つて、女の子がアクセサリーを買う様子を物陰からこっそり見ていますと、怖い顔をした腕章を付けたおじさんに「ちよっと、ちよっと」なんて呼ばれた。変な人だと思われたんでしょうね。理由を話したら、開放してもらえましたが（笑）。

■トキワ荘との出会い

『少女クラブ』で最初に担当したのは、手塚治虫さんの『リボンの騎士』でした。やがて石森章太郎、赤塚不二夫と親しくなつて二人のデビューに付き合つたので、彼らとの縁でトキワ荘に通い始め、ずっと入り浸る運命になってしまいました。取り壊されて長く経つたトキワ荘が今こんなに脚光を浴びているのは、嬉しいような、くすぐったいような気持ちがあります。

目白駅からバスで目白通りを練馬方面へ行きまして、山手通りとの交差点の少し先に二又があります。その交番を右へ入つたあたりにトキワ荘がありました。当時は椎名町——今は駅名だけが残つて、町名は南長崎になつてしまいましたが——「五丁目二二三」という番地でした。

トキワ荘は、昭和五十七年（一九八二）に解体されて、その跡に日本加除出版株式会社という出版社が建ちました。ですが、マンガの聖地といえますか、トキワ荘はどんなところかと訪ねてくる

後輩が後を絶たないので、平成二十一年（二〇〇九）に、跡地近くの区立南長崎花咲公園に「トキワ荘のヒーローたち」の記念碑が設置されました。それから平成二十四年（二〇一三）に加除出版さんが敷地内に「トキワ荘跡地モニュメント」を作ってくださいました。昨年十二月には近くにお休み処ができて、トキワ荘関係のものが置いてありますから、雰囲気が変わると思います。

実際のトキワ荘は、非常にぼろいアパートだったという話がありますが、そんなことはありません。木造二階建ての何の変哲もない建物ですが、真ん中に廊下があつて、その両側に四畳半の部屋が五つずつ、一階と二階にありました。ごく普通のサラリーマンの家庭が住んでいるスタンダードな様式でした。ただ当時は住宅事情が悪い時期ですから、敷金三万円、礼金三万円、それから部屋代がひと月三千元。その他に権利金など色々なお金をとられていました。とくに敷金の三万円はけつして安い金額ではありませんでした。

■『漫画少年』の時代

トキワ荘は『水滸伝』で英雄豪傑が集まつたような「マンガ家の梁山泊」とも言われましたが、ちよっと違うんです。なぜ、トキワ荘に集まつたマンガ家が、一人残らず人気作家になったのか——たった一人、落ちこぼれがいました——と言いますと、そこに集まるまでにふるいにかけていたんです。希望者が誰でも入れるわけではなかった。そこでキーワードの一つとして『漫画少年』という雑誌の話をしたと思います。

『漫画少年』は、昭和二十二年（一九四七）に創刊された月刊児



童雑誌です。子どもたちが争って読んだ戦前の『少年倶楽部』を当時としては空前の七十五万部まで伸ばしたのは、加藤謙一さん（一八九六〜一九七五）という講談社の誇る名編集長です。

終戦になって、戦中に指導的役割を果たした人がマツカーサーの指令で公職に就くことを禁止されました。加藤さんもその一人で、講談社から一時、身を引くことになりました。加藤さんは、驚のような鋭い目で、鼻も驚の嘴のようでした。非常に厳しい方でしたが、どうしても児童雑誌の出版をあきらめられなかった。ページの最中ではあるけれども、奥さんの名義で「学童社」という会社を作って『漫画少年』という雑誌を出したわけです。

加藤さんは、吉川英治をはじめ、大勢の文芸作家を育てましたから、加藤さんを慕って『漫画少年』に書いてくれる作家もたくさんいました。ですが、加藤さんは子どもたちにいいマンガを読ませて読者を育てるべきだと考え、非常にマンガに力を入れたんです。

『漫画少年』は、文字通り全国の（マンガ少年）のために門戸を開いた雑誌です。自分の書いたマンガを投稿させて、いいものは掲載して、とくに優秀な人たちは名前と住所を載せました。ですから、マンガ家になり

たい希望を持っていた全国の子どもたちは、先を争って『漫画少年』に投稿していた。自分の名前が出ていないか、作品が載っていないか、と毎号必死で雑誌を読んでいた子どもたちは、顔は知らないけれども、全国のどこにどんなマンガ少年がいるかを知っていたわけです。それが縁になって投稿者同士で文通したり、会う前から仲間を作っていました。

余談ですが、この『漫画少年』の投稿者には、こんな名前が出てきます。黒田征太郎、小松左京、篠山紀信、清水哲男、田島莊三、田名網敬一、筒井康隆、眉村卓、平井和正、横尾忠則、和田誠……。幸か不幸か、マンガ家にならずによかったのかもしれないが（笑）、自分を何かの形で表現したいというエネルギーを持った人たちが、ここに投稿してきたわけです。とくに横尾忠則さんは、後々まで『漫画少年』のことを熱心に紹介してくれています。

加藤さんは、大阪で手塚治虫という新人が出てきて、いいマンガを描いていることを知っていた。加藤さんは筆まめな人で、手塚さんにも何回か「自分のところへ描かないか」と手紙を出していたわけです。ところが手塚さんは筆不精で、何回も加藤さんから懇篤な手紙が来たのに返事もなかったらしいんですね。

あるとき、手塚さんが石田栄助さんを訪ねて東京へ出てきたのですが、住所がわからない。そこで、学童社で聞けばわかるだろうと訪ねてきたわけです。もう『漫画少年』の編集者たちは「手塚治虫が来た」と色めきたって、すぐに二階にいる加藤編集長に伝えました。学童社は、加藤さんの一家でやっている会社ですから、編集長の部屋といっても机一つの間でしたけれども、そこ



返事で連載になったんです。

当時の時代背景をご存じないと、それがどれほど異常なことかわからないと思います。ふつう新人は一回か二回、テストで雑誌に載せて読者の反応をみて、これはいけるとなったら何回か読み切りを描かせて、連載はその後に始まる。いきなり連載させるなんてことはまずありません。それから私が講談社に入った頃は、月刊誌で『少年倶楽部』も『少女クラブ』もA5判で、三百数十ページのうちマンガは大体二割。いまの子供雑誌は週刊で、マンガが九十数%、活字。ページは懸賞の当選者の名前くらいしか載らないような構成ですが、当時は活字が主、読み物が中心で、マン

で加藤さんは「石田さんは今日結婚して、新婚旅行に出かけちゃったからいないよ」と言っていて、またまた手塚さんが描きかけの原稿を持っていたのを見せてもらった。それが『ジャングル大帝』の下書きで、加藤さんはその場で即座に『漫画少年』への連載を決めたそうです。手塚さんは仰天して、東京に何の足がかりもない自分をすぐとりあげてくれるというので、二つ

ガは付け足しでした。その二割のマンガも私が『少女クラブ』にいたときに、漫画は十本ありましたが、全部足しても四十〜五十ページ。いちばん小さいものは四コママンガ二本で一ページとか、せいぜい二ページ見開きの生活マンガ。いちばん長かったのは手塚治虫の「リボンの騎士」の八ページでした。これは当時としては長編です。今は長編という数十ページありますが、当時八ページのもの連載で載せるのは破格の扱いでした。その破格の扱いを、加藤さんは手塚さんに対してやっていたわけですね。手塚さんは、自分を認めてくれた、世に出してくれた大恩人として、また東京のお父さんとして加藤さんを慕い続けていました。

その後、手塚さんには色々な雑誌社から話が持ち込まれ、東京の仕事も始めますが、当初はホテルで描いていました。ですが、ずっとホテル住まいというわけにもいかなかったので、学童社で加藤さんの机を借りて、よその雑誌の原稿を描いていたそうです。それでは悪いからと『漫画少年』を手伝って、投稿マンガの批評をしたり、コメントを書いたり、それから「漫画大学」なんてマンガの描き方を教えたりしていた。ですから、手塚さんにしてみれば、学童社はまるで自分の家みたいな感じだったんですね。

■手塚治虫のこと

上の写真は、右が手塚さんで、左が私です。二人ともちゃんと髪はあります（会場笑）。手塚さんは、珍しくベレー帽をかぶっていませんが、ふだんはベレー帽をかぶって、丸縁のシューベルトみたいな眼鏡をかけて、鼻が丸くて。初対面で紹介されなくても間違いなく「手塚治虫」とわかる顔をしていました。

ここはトキワ荘ではありません。雑司が谷の鬼子母神の参道に立派な櫓の並木がありまして、その脇にある並木ハウスというアパートです。手塚さんはトキワ荘の後、そこに引越しまして、その玄関先です。手塚さんの奥さんは「編集者と肩を組むなんて珍しい写真」とおっしゃっていましたが、本当にそうだと思います。

私が大学を出て二年目、二十四歳の時で、手塚さんは二つ上の二十六歳。ところが、この人は年齢をサバ読んでいたんです。東京へ出てきた時には大正八年（一九一九）生まれと言っていました。が、本当は昭和三年（一九二八）生まれですから、十歳近くサバを読んでいた。甘く見られたくないというので、背伸びしていたんですね。それは手塚さんだけじゃなくて、たとえば『ゴルゴ13』のさいとうたかをさんも、最初にマンガコンクールに作品を出した時には、あまり若いと採用されないんじゃないかと、三歳サバを読んだそうです。

私も最初は「大正生まれで自分より十歳も上なんて……」と思ったんです。若々しいし、バリトンの非常に響きのいい声だし、背も高い。子ども物の担当者は、気持ちが悪くないと務まらないので、作家も編集者も見た目が若い人が多いんですが、それにしても若い。手塚さんが亡くなった時に、初めて昭和三年生まれだと知って「ちくしょう！」と思いましたが（会場笑）。

ですから、手塚さんの担当は当然ほとんどが年上なんです。難物の手塚の担当ですから、各社とも編集部の中でも手練れを出してくる。行った先で、手塚さんの担当が殴り合いをしたとか、蹴飛ばされて階段から落ちたとか、色々な逸話がありますが、みん

な手塚さんよりも年上でした。当時、秋田書店の『冒険王』の編集長だった阿久津信道さんが「おれが担当だった時は、手塚はまだ金ボタンだった」なんて言っていました。が、学生の頃から知っていたわけですね。私が担当した時にはもう学生服ではありませんでしたが、手塚さんより年下の編集者は私だけだったので、かわいがってくれた面もあったと思います。それで、こんな写真も撮ってくれたんでしょう。

年下ですから、みんな「手塚君」までは言わなかったけれども「手塚さん」でしたね。私も当時から仲間内では「手塚さん」と呼んでいました。でも、だんだん年が経つと「さん」とは呼んでいられなくなるくらい、あの人の偉大さがわかってきた。人から「あなたにとって手塚治虫はどんな人だ」と聞かれると、山梨出身なものですから「富士山みたいな人だ」と答えるんですが、ちばてつやさんが「うまいこと言うねえ」なんて褒めてくれましたけど。富士山に登ったことがある方はおわかりでしょうけれども、ごみや瓦礫で汚いし、苦しいし、空気は薄くなるし、もう二度と来るもんかと思えます。ところが、離れてみて初めて、あの偉大さというか、美しさ、気高さがわかる。手塚さんもそんな感じで、いつの間にか私も「手塚先生」と呼ぶようになりましたが、昔の話をすると、どうしても「手塚さん」と言ってしまうので、そのあたりが混ざってしまうのですが、今日はお勘弁ください。

同じように、石ノ森章太郎も「石ノ森」と言えないんです。赤塚さんも死ぬまで「石森、石森」と呼んでいましたが、どうも「石ノ森」というと別人のような気がして居心地が悪いものですから、今日も「石森さん」で通させていただきます。

■トキワ荘へ

当初、手塚さんは宝塚の自宅にいましたから、連絡は全部電報のやりとりだったわけです。なかなか原稿が来ないので、阿久津さんがついに腹を立てて、電報の宛名を「テツカオソムシ」とやっていたのが、締切りを守らないので「ウソムシ」に変わった。有名な話ですよ。

やがて手塚さんは東京へ出てきて、トキワ荘に入る前に、四ツ谷の八百屋さんの二階に下宿しました。文化放送の近くで、四ツ谷駅から歩いて十分くらいのところでしたね。今はなくなってビルが建ってしまいましたけれども。

手塚さんはたくさん仕事を抱えているのに、新しい仕事を持つていくと断ったことがないんです。ふつう作家に聞くと「断ると次の仕事が来なくなる心配がある。不安定な仕事だから断われないう」と言いますが、手塚さんの場合、私は違うと思うんです。つまり、仕事があるのが嬉しくてしょうがない。描きたいことが頭の中にたくさんあって、今描いているものが終わらないと次のものが描けないから、手の動きがもどかしくてしょうがないという人だから、話を持っていくと引き受けてしまうんです。

私が担当した月刊誌の時代でも連載を十一本持っていました。手塚さんの場合、短くて六ページ、長ければ八ページ、それが十一本。その他に口絵とか、二ページくらいの絵本とか、飛びこみの読み切り物が入って、寒気がするほどのページを持っていましたから、まごまごしていると落ちちやう——間に合わなくて、休載になっちゃうわけですね。そうすると、よその雑誌は手塚治虫のマンガが載っているのに、自分の雑誌だけは「手塚先生はご病

気のため今月はお休みします」なんて書かなきゃならない。これほど編集者として恥ずかしいことはない。ですから、なんとしても落とさないうために、張りついちやうんです。

私が担当をしていた頃、手塚さんは独身ですから、文字通り描いている横に張りついていました——結婚されてからは、マネージャーもついて、座り込みをするのは別の部屋になりましたがね。脇で張りついていっていると、何とかして自分のところの原稿を先に取りたいものですから、他の編集者がいなくなると、先生を連れだして都内某所にかくまって、自分のところの仕事に専念してもらう。有名な「カンヅメ」ですね。で、出し抜かれた編集者は、自分のものを描いてもらえぬ順番が来ているのに、行ってみると先生はいない、もぬけの殻です。そうすると「やられた！」となつて、カンヅメの先を探さなきゃならない。編集者が犯人を追いかける刑事みたいな追っかけっこをやらなければならない時代でした。

四ツ谷の八百屋さんの二階にいた時分は、編集者が夜討ち朝駆けで出たり入ったり、怒鳴り合ったり殴り合ったり、中には手塚さんを殴っちゃった奴までいました。あんまり騒がしいので、家主さんの八百屋さんに申し訳ないと、手塚さんもちゃんとした自分の住処を決めなきゃならないと思っていた頃なんです。

『漫画少年』の加藤さんの息子さんが編集を担当していたのですが、結婚して部屋を探していた時に、たまたまトキワ荘を見つけてました。池袋モンパルナスのように、池袋近辺には画家が多かったです。マンガ家も多かった。電車一本で講談社まで行けますしね。そういうマンガ家に弟子入りした人たちが、通ってくる

編集者に認められて、先生の紹介を受けて描くようになる。そうすると、先生の近くに住まいを見つけてということ、練馬や池袋界隈には割合マンガ家が多かったわけです。

それで、加藤さんのご息が新居を探すのに、トキワ荘はマンガ家の住居が多い地域の真ん中だからいいじゃないかということに住み着きました。手塚さんも、毎日のように学童社で仕事してましたから、話を聞いてトキワ荘を見に行った。気に入ったんでしょうね。二階の十四号室に住み始めたんです。

『漫画少年』がトキワ荘のグループが生まれるきっかけになった理由の一つは、手塚さんが加藤氏につられてトキワ荘に住み着いたこと。それから、寺田ヒロオさん——『背番号0』や『スポーツマン金太郎』など、明朗で純粋な、気持ちのいいスポーツマンガを描いて非常に受けていた人です——も、ずっと『漫画少年』を手伝っていたので、トキワ荘が棟上げをした翌年の大みそかに引越して、手塚さんの向かいの部屋に住むようになりました。寺田さんは面倒見のいい兄さんの人で、それから後、手塚さんを訪ねてくるマンガ少年たちの面倒を見てやって、彼らがその手づるでトキワ荘に住みつくようになっていったわけです。

なぜトキワ荘に選りすぐりの粒ぞろいが集まったか。それは偶然ではありません。あそこに来る人たちは、みんな『漫画少年』の投稿仲間だった時代に名前を知っているし、どういふマンガをどれだけ描けるかということも知っている。だから「あいつなら住みたいと言ったら呼んでもよかろう」ということで、入りたいという人を選んでいました。トキワ荘に住み着く前に、一種のスクリーニングがあったからこそ、揃いも揃って一流のマンガ家に

なっていたということがおわかりいただけるかと思えます。

■手塚治虫の仕事ぶり

たくさんの雑誌から仕事の依頼が来るんですが、手塚さんは仕事を断らない人で、仕事が山ほどあって、その横に目を三角にしてタバコをプカプカ喫っている編集者が何人も張り付いていて、寝かせもしてくれないし、飯を食うのもやっと。便所に行く時には逃げないように財布も持たせず、確かに便所だということがわからないと編集者が行かせてくれない。そういう、時間に追いかけて描くのが、手塚さんのベストコンディションなんです。困った人なんですけどね。ですから、私たちも横にいて寝かせられないんです。さっき言いましたように、連載が十一本、その他に飛び込みも入る。しかも当時はアシスタントがいないものから、頭からしつぽまで全部一人でやっていました。他の人と違って、手塚さんはあまりいいねいに下書きをしないんですよ。丸、三角のテルテル坊主くらいの下書きでネームを入れていく感じだから割合筆が早い。平均一日二十枚くらい、月平均三百二十枚。七百二十枚描いたという記録があります。

ところが、夜中に眠くなつてくると、子どもっぽい駄々をこねるんです。私が担当した時は「この紙じゃ描けない」と言うんですね。「さつきからちゃんと描いてるじゃないですか」「いや、これじゃダメだ」「じゃあ、何に描きたいんですか?」「銀座七丁目のヤマハの地下で売ってる五線紙の裏が、筆のかかりが非常によく、あれがないと描けないんだ」。夜中の二時にそんなことを言われてもしょうがない。「明日の朝一番で買ってきますか

「今はそれで描いてください」「いや、描けない」……そんな具合です。

『少年マガジン』の編集者だった宮原照夫君の場合は「どここの丁定規じゃないと描けない」と。この宮原君というのが真面目な男で、夜中に文房具屋を一軒一軒たたき起こして買ってきたそうです。二十四時間開いてる店なんかない時代ですよ。さすがの先生も「あつたの!？」って驚いたらしい(会場笑)。私の後を引き継いだ『少女クラブ』の新井善久君の時はチョコレートだったそうです。手塚さんはチョコレートが好きで、よくポリポリ食べていましたね。

ようするに眠いんですよ。眠いけれども、言っても寝かしてくれないから駄々をこねて、ペンを放り出して、なんとか一眠りしたい。実際は寝かしちゃった方がいいんですよ。手塚さんは不思議な人で、部屋にも時計がないんですよ。NHKで手塚さんの特集をやるたびにしていると、腕時計もしてなかったような気がする。これは調べて、わかったらお知らせします(笑)。

手塚さんはよく「十五分、寝かしてください」と言うんですよ。で、寝ますとね、だいたい十五分経つとガバツと起きてペンを持ってスツと仕事に入れる。ですから、本当はぐずぐず言うのを起こしとかないで寝かしちゃったほうが後が早い。ですが、やっぱり編集者の性で、それができないんですね、寂しいことに。

あとはヤキモチ焼きというか、負けず嫌いなんです。先日、伊東章夫さんというギャグマンガ家と話していて思い出したのですが、愛読者大会というイベントに手塚さんを連れて行って、出し物としてマンガ教室をやってもらうのですが、金沢で『少女クラ

ブ』の愛読者大会をやった時、女の子ばかりの中に、金ボタンの学生服を着た高校生がいるんです。居心地が悪そうにムズムズして。その彼が終わったら「手塚先生に会わせてくれ」と訪ねてきた。「先生は忙しいからダメだよ」と断ると「ちゃんと手塚先生から手紙をもらってる」と言うんです。びっくりしましてね。たしかに「旅館まで会いに来い」というハガキでしたけれども。

『漫画少年』の時代には、石森章太郎が高校二年の時に「テツダイタノムスグキテクレ」という電報を宮城県の田舎に出したことがありましたが、どこに何という有能なマンガ家の卵がいるかを詳しく見ているんです。そして、そういう人たちを呼んで、ちゃんと見てあげたり、アドバイスしたりする。さすが手塚治虫は偉いと感動しましたが、後で考えてみると、それだけじゃない。あの人は、新人でも、自分のライバルと見るわけですね。いっどこから、どういう優秀な新人が出てきて、自分の地位を脅かすか分からない、誰にも負けたくないという気持ちから全国に目を光らせていた。

手塚さんの最大のスランプと言われたのが、劇画が登場したときです。手塚さんの、いかにもマンガらしい、デフォルメされた絵とは異なる非常にリアルな絵が出てきて、マンガが劇画に押し流された時代です。あの頃、劇画に対してヤキモチを焼いていたね。

それから、石森章太郎の『ジュン』の事件。石森さんが、手塚さんの会社で出していた雑誌『COM』に『ジュン』という作品を連載していた時、ある読者から「『ジュン』がいい」と聞いた手塚さんが「あんなのは漫画ではない」と返事を書いちゃった。

そうしたら、その読者が、石森さんに「『ジュン』なんかマンガじゃないと手塚先生が言っていた」と告げ口したんです。石森さんはびっくりして「手塚先生がそう言うなら、手塚先生の雑誌に載せるわけにはいかないから、今月限りでやめさせてもらおう」と言うので、今度は編集担当者がびっくりして手塚さんに伝えると、その晩、トキワ荘にいる石森さんのところに謝りに来た、と。これは石森さんの『風のように』に、手塚さんが亡くなった時の思い出話として書かれています。実際には、石森さんの練馬の自宅に来たらしい。まあ、相手が石森さんだから謝りに行ったんだろうと思いますが。

『ジュン』は、マンガではなくて、マンガで描いた詩だと思っ
てます。ああいうところまで幅を広げられたのが、石森さんの才



能だし、それをまた手塚さんは見抜いて、ヤキモチを焼いたとい
うことだったと思うんです。

■石森章太郎と赤塚不二夫

石森章太郎と赤塚不二夫がトキワ荘に入ったのが、昭和二十九
年（一九五四）です。石森さんが十八歳、赤塚さんが二十歳。上の
写真は、私が撮ったスナップですが、赤塚さんから、「これをで
きるだけ機会があることに見せてくれ。おれが色男だったことの
証明だから」と頼まれていたので、お見せします。これだけ見せ
れば、義理が果たせたことになる（会場笑）。本当に色白でハンサ
ムだったものだから「これは少女ものがいける！」と思って、
少女マンガばかり描かせたんです。ところが、あんまり当たらな
い。それで私が「あなたは故郷の新潟に帰って風呂屋の看板描き
でもやってろ」と言ったらいいんですね。私はそんなひどいこと
を言った覚えはないんですが、赤塚さんは「あれがこたえて、本
当にマンガをやめようと思った」と言っていました。

ある時、石森さんから「マルさんねえ、赤塚はギャグの方が向
いていると思うよ」と言われたんです。あ、そういうええそうだ
なあ、と。一緒に仕事をしながら、くだらないギャグや洒落を言っ
たりするわけです。たとえば、赤塚さんは痔が悪かったんですが、
痔の坐薬がピストルの弾に似ているでしょう。あれをピストルに
込めてバーンと撃って殺したら、「それは他殺じゃない、ヂサツつ
て言うんだよ」なんてね（会場笑）。そういう、どうでもいいよう
なくだらないシャレばかり言うので往生した記憶があるんです。
ですので、ギャグマンガに切り替えたらすごく当たった。残念な

がら私のところじゃなくて、小学館の『おそ松くん』でブレイクしたんです。

赤塚さんは石森さんより二つ上ですけども、石森さんの方が年上のような感じで、赤塚さんは石森さんのアシスタントと炊事当番をやっていました。私は、赤塚さんに「あんた、商売間違えたよ。食いもの屋やったほうが当たってたよ」なんてよく言ったものですが、ありあわせのもので非常にうまいものを作る名人でした。売れっ子になってからも「餃子の会」というのをやってくれまして、新宿の一杯飲み屋を一日借り切って、赤塚さんが餃子を作るわけです。そして昔からのなじみの編集者や知人を選んで食べさせてくれる。これがじつにうまい餃子でしたね……余計な話になっちゃったな（笑）。

私にとって、石森さんと赤塚さんは、御神酒徳利みたいに二人で一对でした。そこに、水野英子を手塚さんのところで紹介されて、育てた——なんていうとおこがましいですけども、一人前に描けるようになったわけです。水野さんは、そのあとの少女マンガの流れを作った人です。

■水野英子を発掘

次の頁の写真は、トキワ荘が壊される寸前にNHKが特集番組を組みまして、当時のトキワ荘の住人を呼んで「同荘会」をやった時に、手塚さんと水野さんを撮ったものです。水野さんはこの写真が気に入っているから、これだったら文句を言われないので、お見せします。

先ほど、みんなで次に入る人を選んだと言いました。トキワ荘

は女子禁制というわけではなかったのですが、紅一点で入れたのが水野英子でした。

『リボンの騎士』が終わったとき、次は何をしようかというところで、手塚さんの部屋でかなりやり合ったんです。手塚さんは自分が描きたいものを決めていて、編集者が何を言おうと絶対譲らないんですね。私の場合、連載のタイトルは全部決めさせてもらっていましたが、私にタイトルを決めさせてくれなかったのは、手塚治虫と石森章太郎の二人です。二人とも、もうどうしようもない、描き直させる時間もないという時に、自分の気に入ったタイトルを描いたものを原稿として持つてくるんですよ。

その時、手塚さんは『火の鳥』をやりたくてしょうがない。ですが『火の鳥』は『漫画少年』が潰れてしまったから、おしまいになったわけです。少年雑誌に描いていた『火の鳥』を少女雑誌に載せるのは無理だろうと言ったんです。それに、他の潰れた雑誌に描いていたものの続きをやるのは感じが良くない。ただ、手塚さんはどうしてもやりたいので「押入れの上の天袋に、前の原稿の紙包みがあるから、編集長に見せてよ。ちゃんと王女様とか入れて少女向けに描くから」と言うので、仕方なく持っていたわけです。で、天袋を掻きまわして『火の鳥』の原稿を探していた時に、邪魔になってしょうがない包みがありました。「先生、これなんですか?」「それね、下関の中学生の女の子が描いたんだけど、結構いけるよ」。どんなものかと見てみたら、私は宝物を探し当てたという喜びで鳥肌が立つ思いがしました。

『少女クラブ』の担当になった時、どうしたらいいかわからなくて困り果てたと言いましたが、当時の少女マンガは、私が見て

も少女向きだとは思えないようなものばかりでした。作者も、水塚さんは別として、長谷川町子さんが戦前から描いていた、たった一人の女性のマンガ家で、例外です。あとは小野寺秋風さんなどで、いがぐり頭をおかっぱ頭に、半ズボンの代わりにスカートをはかせただけというような女の子が出てくるマンガばかりなんです。それを女の子が見てもおもしろいわけがない。どうしても、戦前から描いている男のマンガ家が少女マンガを描くと、そういうものになってしまう。こんなものでいいのかなあと思っていたところに見た水野英子の絵は実にかわいらしいんですよ。こういうものが女の子にはいいんじゃないかと思っていると、水塚さんに「マルさんのところで育ててみたらどう？」と言われたの



で、会社へ持って帰りました。当時『少女クラブ』の編集部は十人いましたが、女性が二人いて、その二人とも「かわいい！」と言ってくれたので自信がきました。水野英子にまずはコマもの、次は四コマ、一ページものと順々に描かせて、あの水野流と言われる画風が実現したわけです。

『少女クラブ』は、ふだんはマンガより活字のページのほうが多いですが、正月と夏の増刊号になると、逆に八割がたマンガの方が多くなるので、どの編集者も手持ちの手勢ではマンガ家が足りないんですね。そうすると、私がトキワ荘へ行って「誰か八ページやらないか？」なんて言うとなんか立候補する。まだ足りない時には、石森さんと赤塚さんに別途の合作を頼みました。石森さんは、誰もやったことがないような案を出すと、新しいものには何でも食いつく人でしたから断りません。石森さんと赤塚さんの二人に「いずみあすか」という名前前で合作を描いてもらったんです。「いずみあすか」の作品は六本くらい残っています。どれも抜群に良いマンガです。ふだん自分たちが描けないようなもの、石森さんが描きたいと思っていたものを自由に描かせたものですから、非常に良い。ただ、埋まらないページが出てきてから「十六ページあるんだけど、埋まらない？」なんて石森さんのところへ持っていくので、いつもギリギリで頼むわけですよ。当然、完成もギリギリになる。締切が今日か明日かで、間に合うか間に合わないか。いよいよできあがって、さあ、ペンネームをどうしようか。「今日か明日かだから、泉鏡花の『鏡花』を『あすか』に換えればいいじゃん」なんて「いずみあすか」という名前になったんです。

で、そこに水野英子を足したらどうなるだろうと考えて、三人合作のマンガをやりました。それが、ペンネーム「U・MIA（マイア）」の作品です。三人ともワグナーが好きだから、ワグナー調のドイツ人らしい「マイヤー」という名前はどうかだろう。それで「U」をドイツ語読みすれば「ウー」だから「ウマイヤ」になる。さらに石森さんがドイツ語の綴りではなくて「MIA」にしたんです。つまり、水野・石森・赤塚の頭文字をとった、たいへんうまくいった命名でしたね。

当時、水野さんは下関にいたのでやりとりが大変で、私はともも続けられないと思ったんですが、たいへん評判がよかったものですから、あと二、三作やらせようということになった。じゃあいつそのこと下関から連れてきちゃえ、と。ただ、水野英子はまだ十八歳。そんな女の子を東京へ連れて来てどうするか。講談社の別館があったので、そこで二カ月くらいは一人住まいさせて、店屋物食べながらでもいいだろうと思っていたら、たまたまトキワ荘に一部屋、空いたという話があった。すぐに飛んでって、家主さんに必要なお金を全部納めて、講談社で三カ月借りてしまいました。それで、通常のスクリーンングを経るのは別の口から水野英子を入れたわけです。水野英子も『漫画少年』の投稿作家の一人で、いつも佳作以上には入っていましたから。

ただ、トキワ荘の住人たちは、マンガだけ描いているまじめな青年ばかりだといえ二十歳前後の男ばかり。そこに十八歳の女の子を入れるなんて、狼の群れの中に子羊を投げ込むようなもので心配でしたが、たまたま赤塚さんのお母さんがいて、食事の面倒まで全部見てくれたので、安心でしたね。

最初に水野英子を連れて行ったときの話ですが、女性のマンガ家が描く主人公はどうしても本人に似るわけです。で、水野英子の主人公は飛びぬけてかわいいんですよ。ですから、水野英子を連れて行くよと言ったら、トキワ荘の二階は大いに沸き立った。赤塚不二夫なんか朝から掃除をしてくれたりして（笑）、みんな待ち構えていたわけです。そうしたら、おかつぱ頭にGパンをはいてトンボの眼鏡をかけて、ラタンラタンの籠を提げた女の子が「こんにちは、水野です」なんてやったもんですから、みんなシラッとなって、一人去り、二人去り、赤塚さんだけがお茶を淹れてくれた（笑）。本当に水野さんは、少年というか、仔羊どころか、正体を表すと、みんなは追いまくられていました。

そんなことで、居心地がいいものですから、三カ月の約束が半年になって、故郷の家族から私のところに「英子から何も連絡がないけど、どうしたんでしょうか」なんて手紙が来たのでいやがるのを追い帰したんです。

■トキワ荘の人びと

これまで名前の出た人たちの他に、どんな人がトキワ荘にいたか。たとえば、よこたとくおさんは水野さんより後に入ってきたんですが、生活ギャグマンガを描いていました。私は赤塚さんより、よこたとくちゃんの方がギャグマンガ家として伸びるんじゃないかと思っていたんです。今はサラリーマンマンガみたいなものを描いています……。あと「通勤組」と私たちは呼んでいたんですが、自分の家が東京にあるので、トキワ荘には住まなかつたけれども、『漫画少年』から出て、手塚治虫を信奉する――よ

うするに「手塚チルドレン」というような連中がいました。永田竹丸は、ちよつと年が上で、寺さん（寺田ヒロオ）と同じくらいの世代になります。園山俊二は、たった一人『漫画少年』の仲間じゃない例外ですが、寺さんの紹介で入ってきた。早稲田の漫研の出身で『がんばれゴンベ』『ペエスケ』『ギャートルズ』など、切れ味のいいマンガを描く人でしたね。それから、つのだじろう。未だに羽織袴ですが、新宿の床屋さんの息子で、毎日スクーターで通っていました。クソまじめな男で「みんなどこなところ集まっているのに、ちゃんとマンガの話やお互いの批評をしないで、まるでくだらない映画の話なんかしてるのはけしからん」と挑戦状を叩きつけたんですが、すぐにみんなに同化してしまつて「まじめ」がとれて「クソ」だけ残つたなんて言われた男です。彼のいちばん下の弟がつのだ☆ひろです。よく似てますね。

それから、長谷邦夫、高井研一郎。実は水野英子が入った部屋は、次に高井研一郎さんが入る順番だったらしいんですね。高井さんが九州の高校を卒業してやつと東京に出てきたら、そこに水野さんが住んでいたのので、住みそこなつちやつた。あと横山孝雄なんて人もいました。

昭和二十九年（一九五四）七月、ここへ集まつた連中が、新人でどこにも描かせてもらえないけれども、戦前からのものとは違う本当に良いマンガを作ろうということ、寺田ヒロオさんを中心に「新漫画党」を結成しました。会費は百円、例会は毎月持ち回りで自分たちの部屋でやる。しかし一年で解散して、第二次の新漫画党が結成されます。こちらがその後も活躍した新漫画党で、言ってみれば、トキワ荘グループの中核になったわけです。寺さ

んが総裁で二十三歳。藤子不二雄は二人とも二十二歳。つのだじろうが十九歳。鈴木伸一が二十二歳ですが、すぐに外れて、横山隆一さんのおときプロに行つてしまいました。石森が高校を卒業したばかりの十八歳。石森さんと松本晟（あきら＝零士）さんは同年同日の生まれですから、松本さんも同じ年に東京に出てきます。それから二十歳の赤塚さんが少し遅れて入っています。園山俊二さんも後から寺さんの紹介で入つてきた二十歳です。というわけで、この八人が入つてきて、第一次から坂本三郎、森安なおや、永田竹丸が脱退しました。森安は脱退というよりは、寺さんが辞めさせたようです。

新漫画党は、お互いに切磋琢磨してやろうという意識のもとに集まつたのだと、私は思っていました。そうでなければ、あんなにみんなが選りすぐりのマンガを描けるわけがない。ですが、そんなことは全くなかつたそうです。安孫子さん——藤子^④の話を知ると、だべるばかりで、あまり酒も飲めない。当時お酒といえば、寺さんがつくつた「チュウダー」という、焼酎をサイダーで割つた他愛のないもので酔つ払つてたそうです。

ある時、石森さんと赤塚さんがせつせと描いているところへ長谷さんが手伝いに来てくれたものですから、私も「これなら明日の朝までに二十枚は完全にいけるな」と安心して、家主さんが酒屋なのでジンとグレープジュースを買つて、ジンを三分の一、グレープジュースを三分の二混ぜれば飲み物になるなんて言つて、置いてきたんです。それが大変な間違いで、次の朝行つたら、一枚も仕上がつてない。動物園の静かな午後というか、三人がトドの昼寝みたいにゴロゴロしているんですよ（笑）。後に「恐怖の

マルさんカクテル」なんて名前を付けられて、石森さんがよく話していましたが、それくらい酒に弱かった。この連中が独立して、別々のところに住んで、それぞれが一人前のマンガ家に成長して「先生」なんて呼ばれるようになってから、銀座あたりで飲むようになりましたが、それまではみんな飲めなかった。それから食べ物の方では、赤塚さんの手料理でキャベツを塩で炒めたのがうまいんですね。近所の商店街を歩くと、八百屋のおばさんが赤塚さんをつかまえて「お兄ちゃん、キャベツがあるよ」なんて言ったくらい、キャベツばかり買っていました。

そんなトキワ荘の主は誰かというと、南京虫なんです。ひどいんですよ。水野さんはトキワ荘の話をする時、必ず南京虫の話が出てきます。私は割合虫に好かれる男で（笑）、私が行くと、待っていましたとばかりに南京虫が来るものですから、五年間も担当して通ったのに、トキワ荘で徹夜をしたことは一度もありません。とにかく手塚さんは、この連中に、映画を見なさい、音楽を聴きなさい、いい本をたくさん読みなさい、人のマンガなんか読んではかりいたんじやダメだと盛んに言っていたので、みんなそれだけはよく守っていました。

■「漫画」から「マンガ」へ

今日いちばんお話ししたいのが「漫画」から「マンガ」へ、ということなんです。いまは大学でもマンガを研究する学科がありますし、京都精華大学ではマンガ家の竹宮恵子さんが学長になりました。それくらいマンガ研究は広まっています。その中で、今はみんなカタカナで「マンガ」と書くようになってきました。それはどうい

うことか。漢字の「漫画」は「漫」の字が入っていますから、結局、笑わせるのが目的です。おもしろさ、ギャグやユーモア、風刺、つまり「笑い」が入ってないと「漫画」じゃなかった。笑いがいかぎり、「漫画」とは呼ばれなかった。ですから「漫」の字があつてよかつたわけです。戦後マンガの開祖、ストーリーマンガの創始者と言われる手塚さんでさえも「マンガでは、ユーモアの要素を欠いてはいかん」と言っていたくらいです。

時代が下つて、劇画が入ってきました。講談社から『少年マガジン』が出て、百万部という部数を越えた頃が、劇画が最も華やかになった時代。マンガという名前が劇画に押しつぶされて、マンガでなく劇画という名前が通った時代もありました。先ほども少しふれましたが、手塚さんさえも「自分の絵は時代遅れでダメだ」とスランプになった時代です。

その後、マンガにとって受難の時期が到来します。昭和三十年（一九五五）をピークに〈悪書追放運動〉が吹き荒れました。「マンガは子どもの精神的な発育を阻害するから、マンガを読む子は馬鹿になる。マンガは悪である」ということをいわゆる〈識者〉と呼ばれる一部の教育評論家、児童文学者が言いだしたのです。それにPTAのお母さんたちが乗って、全国の各地で不買運動が起こる。またそれに押されてマスコミや政治家が加わってきて、自民党の教育部会が編集者と呼んで吊し上げたり、最後に行政から警察までが出てきて「売らない・買わない・読ませない」という〈三ない運動〉まで全国に広まっています。

「子どもの教育を考える会」という会——結局はマンガ家を吊し上げる会でしたが、そういうところに、手塚さんもよく連れて

いかれていました。私は新米編集者でしたが、先輩がみんな逃げちやうものですから、おしやべりな私が代わりに呼び出されて、吊し上げられました。医学博士・手塚治虫の反論は「子どもの体は主食だけでは不十分で、楽しくおいしいおやつがあつて初めて健康に育ちます。子どもの心も同じで、主食になる教科書だけでなく、楽しくおいしいおやつがあつて初めて健全に育つのです。マンガはそのおやつの一つです」という「マンガおやつ論」でした。

一方「マンガけしからん論」のほうは、活字だと読んで自分の頭の中でイメージを膨らませて、活字をストーリーに自分で場面を組み上げるといふ精神的な働きがあるから、活字はいいけれども、マンガは見たまま理解できてしまう、頭を働かせる余地がないから、マンガは子どもの教育に役立たない。そんな悪書は全部持つてこいということで、学校の校庭にマンガの雑誌や単行本を積みあげて燃やした焚書騒ぎが全国で起こりました。昔、秦の始皇帝の時代に「焚書坑儒」といって儒教の本が焼かれたそうですし、ヒトラーの時代には反ナチス的な、ユダヤ人の書いた本はけしからんということ、同じように焚書騒ぎがあつた。これらは〈史上の二大愚行〉と言われましたが、日本の悪書追放も加えられて〈三大愚行〉と言われてもおかしくない、馬鹿な話だと思いません。

ですから、マンガ家になりたいなんて言おうものなら、ひんしゅくを買って袋叩きにされたり、親には勘当される時代でしたから、大っぴらにマンガについて話もできない。ですが、トキワ荘の二階に来ると、朝から晩までみんな机を並べてマンガを描いている。

これからマンガを描こうと思う人たちにとって、トキワ荘の二階は心のオアシスだったわけです。よく『水滸伝』の梁山泊にたとえられますが、そんな立派なことよりも、外では誰にも相手にされないのに、ここへ来れば何も気兼ねしないでマンガの話ができる。通勤組までいて、みんなでマンガを支え合っていた。だからトキワ荘というのは、悪書追放運動の中で、オアシスの役割を果たしたところがあるんじゃないかと思えます。

現在は、おもしろおかしくて、滑って転んでワツハツハがなきや「漫画」じゃない、という時代ではありません。また「マンガばかり読んでいちやダメだ」と言われた時代でもない。たとえば『子連れ狼』は大好きなテレビドラマですが、原作はマンガです。そのようにテレビドラマの原作が、小説ではなくてマンガがとって代わるようになってきた。シリアスなストーリーをマンガがこなすようになってきた。

手塚さんは「『鉄腕アトム』を自分の代表作だなんて言わないでくれ」と言っています。『鉄腕アトム』を書いている最中に「いまマンガ家の中で、人工衛星なんて人間が作ったものが宇宙に飛んでいくとか、事もあろうにそれに人間が乗っているなんて荒唐無稽なものを描いている輩がいる」と書いた有名な大学教授の物理学者がいましたが、その二年半後、一九五七年にスプートニクが飛びました。その教授の顔を見てやりたいと思いましたがね。人工衛星なんて荒唐無稽、それに人間が乗るなんて馬鹿げたマンガを子どもに見せちゃいかんと、超一流の科学者が言ったわけです。そういう時代に『鉄腕アトム』を描いたものですから、かなり叩かれた。手塚さんにしてみれば、手を縛られアイデアも縛られ、

描きたいことも描けない。あんな制約の中で描いたものだから、今のようないかな時代なら、まったく違うアトムを自由自在に飛ばせられたのにと、無念だったのでしょうか。だから「アトムを自分の代表作と言わないでくれ」という気持ちは、私も横で見ているので、よくわかります。

手塚さんは「マンガに悲劇を持ちこんだのは僕なんだ」と言っています。カタカナの「マンガ」にしたいというのは、そこなんです。手塚さんは、ストーリーを伝えるものが「マンガ」なんだと考えていた。今でこそ、大手を振って、サブカルチャーとか文化の一部と言われるようになりましたが、昔のとおり単なるお笑いのエンターテインメントだけだったら、とても「文化」とまで評価されなかったんじゃないでしょうか。

石森章太郎は「萬画」と書いて「マンガ」と読もうと提唱しました。残念ながら、彼は早死にしたので、その言葉は普及しなかったのですが、もしも、一般の賛同が得られたら「漫」ではなくて「萬」の「萬画」にしたいと私も思います。でも次善の策としては、同じ音で「マンガ」ですし、とくに今は世界的になって、ローマ字の「MANGA」が通用している時代ですから、せめてカタカナの「マンガ」を、正式な表記の仕方だと考えていただきたいと思います。

『漫画少年』があつて、そこを通じてみんなが「手塚チルドレン」といわれるように手塚治虫を信奉して、同じ考え方をする仲間がトキワ荘に集まった。それから、タイミングとしては、戦後の民主教育を受けてきた子供たちが育つて、ちょうど彼らが子供雑誌を読む世代になってきた。そのとき、戦前のマンガ家―読者

からすれば、お父さん、お祖父さんの世代が描いている作品を読まされていたところに、もっと新しい、自分たちのお兄さんやお姉さんの世代の描いたものが現れた。そうすると考え方の波長が合うんですね。同じ言葉をしゃべっている。近い世代の人たちの書いたものなら、理解できる、話を通じるようになって、新しい戦後派の感覚をもったマンガ家たちの需要が増えてきて、世代交代が起きた。ただし、そういう作家はたくさんいるわけではなくて、たまたまトキワ荘にその卵がいて、彼らが新しい舞台を与えられて一斉に世に出ていった。そういう世代交代のタイミングがトキワ荘の人たちを世に出すきっかけになったんじゃないかと思えます。そしてトキワ荘グループが、その後のマンガの流れの中心になっていった、ということでは話をもとめたいと思います。

■質疑応答

質問① トキワ荘での食事はどんな風だったんですか。

丸山 みんな一緒に台所で炊事をして、それぞれの部屋に持ち帰ります。昼間は外食でしたね。でも、連中は起きてくるのが昼間でしたし、夜型人間ばかりでした。外食では「松葉」というラーメン屋が有名になって、昔のメニューそのままでも変わってないと言っています。藤子・F・不二雄さんがずっとおいしくなっています(笑)。藤子・F・不二雄さんや赤塚さんのお母さんも住んでいまして、とくに赤塚さんのお母さんは、石森さんと水野さんの炊事も面倒を見てくれましたし、私も昼飯を食べさせてもらいました。

質問② 悪書追放運動について、編集の現場を離れて久しいとの

ことでしたが、ご感想などあれば伺えますでしょうか。

丸山 基本的に表現の自由、言論の自由の問題ですから、どんな

ことをしても守らなければいけない。やはり編集を担当する側として、これはまづいなと思う作品もあります。自主規制というか、出版社やマスコミのプライド、倫理の問題として解決すべきであって、外から規制されて枠をはめられるべきものではない。よそからとやかく言われないように、出版社やマスコミの側で、倫理観をもって判断していくべきだと思います。たとえば『はだしのゲン』の問題。それから最近では『美味しんぼ』が問題にされていますが、全体を読めば、丹念に取材して福島状況を書いていて、最後に少しだけ鼻血の場面が出ています。すべてを読んでいない人が、そこだけをつかまえて、けしからんと言っているんですね。

昭和三十年の悪書追放運動の時、編集者が集まって「日本児童雑誌編集者会」という組織を結成して『鋭角』という月刊のパンフレットをつくって反論したことがあります。その第二号で文学者や識者を集めて討論会をやった時に、村岡花子さんと呼んだんです。私ははつきりと覚えていますが、村岡さんお一人が「みなさん、ちゃんと読みもしないで批判している。それはフェアではない。今の子ども雑誌は、曲がりなりにも子どもの要望に応えています。ただ、その応え方が十分ではないので、もっと程度の高い応え方になってほしいけれども、みなさんがおっしゃるようなとんでもないことはやっていない」とビシッと言ってくれたんです。とくに「あ

なた方は読みもしないで批判している」という言葉には拍手しましたね。ですから、村岡花子さんが今、テレビドラマになっているのは、非常に嬉しいんです。小学館の『少年サンデー』を創刊した初代編集長の豊田亀市さんが「児童文学が売れなくなったのは、自分たちがおもしろいものを書けなくなったのが原因なのに、それをマンガのせいにしたのが、悪書追放運動だ」と喝破しましたが、村岡さんのようにちゃんと見てくれている人もいます。甘えるわけじゃないですけども、よそからとやかく言われないように、出す側も自制しなければならぬと思います。

質問③ 〈唯一の落ちこぼれ〉という、森安なおやさんが気になっ

たのですが。

丸山 森安なおやさんは、田河水泡さんの内弟子だったんですが、

破門になったか何かで出てきて、田河さんからもらった大きな机をトキワ荘のこの部屋に持ちこみました。森安さんは、非常にがさつというか、部屋代も払ったことないし、人が飯をつくっていると付いていって「それ、いいねえ」なんて食べさせてもらっちゃう。トキワ荘を壊すときにNHKが企画した同荘会に森安さんが来て、私の顔を見るなり「わー、マルさんだ！」って頭を抱えて逃げましたね（会場笑）。ところが、描くマンガは非常に繊細で、いいマンガでした。

いいマンガが描けたのに、そしてあれほどの仲間の中にいたのに、なぜ彼が落ちこぼれてしまったのか。約束を守らないんですよ。私は三回、原稿を落とされました。一回目は、



学習漫画を頼んだら、どうしても間に合わなくて、ギリギリになって他のマンガ家に代作をやらせた。二回目の時は、彼も平身低頭して謝ってきましたから、今度はちゃんとやるだろうと思つて別のマンガを頼みました。この時は私も、森安さんのことだからと「雨傘」——落ちた時、雨が降った時のために雨傘番組を用意しておいて、それを代わりに入れました。それでも一回、私もこれで賭けるからといった時も落とされましたので、さすがの「仏のマルさん」……とは言われていませんでしたが（会場笑）、やっぱりダメだと思いましたがね。ですが、彼が岡山に帰って、仲間がお金を出してくれ

てつくつた単行本『鳥城物語』を見ると、なんでこれだけのものを描けるのにやらなかったんだらうなと思いましたがね。

NHKのトキワ荘同窓会は『わが青春のトキワ荘』現代マンガ家立志伝』（一九八一年）として放送されました。ただ同窓会のつもりでみんな集まったのに、森安さんの売れないマンガ家失敗物語みたいになってしまったんですね。上の写真は、その時にトキワ荘の襖に書いた寄せ書きです。手塚さんが「トキワ荘同窓会」と書こうとして「とき」まで書いたんですが、トキワ荘はカタカナなので、そこで止めたんです。それを水野さんがつかまえて「とき」を「どき！」にしました。手塚さんは左下のほうで、襖の取っ手を太陽にして日が昇っても徹夜明けで描いています。水野さんが南京虫を潰しますね。スクーターに乗っているのが、つのださん。森安さんは何か食べてる。

で、真ん中が空いたんですね。この時、僕はマンガ家じゃないのに呼ばれていたんです。それで「マルさんも描きなよ」って言われたんですが、「いくら厚顔無恥といはいえ、プロのマンガ家の真ん中に描く度胸はないよ」って言ったら、石森さんが描いてくれたんです。当時私はこんな焼きそないの土瓶みたいな顔していたんですね（会場笑）。それで、丸山昭というサインだけして、持っている袋に『少女クラブ』だけ書かせてもらいました。

ただ、NHKで放送された時に、この襖も映していたんですが、きれいに私だけを抜いて、この絵が出てこないんですよ。座談会もやったのに、私だけ抜かれている。さすがにN

H Kさんの技術だと思いましたね（会場笑）。私も、NHKの大きな番組に出してもらうなんて初めてですから、放送日が決まってから親戚中に連絡したのに、カケラも出ない。それで親戚中で面目をつぶした（会場笑）。だからその後、NHKから取材があるたびにその話を持ち出して、嫌味を言っています（笑）。

（まるやまあきら 編集者）

*写真は四十一頁（『トキワ荘実録——手塚治虫と漫画家たちの青春』小学館文庫より転載）以外、丸山氏からご提供いただきました。